

## 思考におけるたくましさを育てる算数学習

—教材の系統性・累積性をふまえ、子供のよさを生かす学習指導を求めて—

< 思考におけるたくましさを育てること >

「自らの判断のもとに、自らの既習内容を新しい課題解決に主体的に『活用』する力」

「自らの経験や既習内容から、解決の方法と結果の『見通し』をもつ力」

「日常の事象についての数理的な考察や処理が簡潔、明瞭、的確にできる算数の『よさ』が分かる力」

などの力を育てること

また、この3つの力は

新しい学力観に立った学力

- 学んだ結果としての学力 . . . . (視点1)
- 学んでいく過程としての学力 . . . (視点2)
- 学ぼうとする態度としての学力 . . . (視点3)

と対応してとらえることができる。

< 系統性・累積性をふまえ、子供のよさを生かすこと >

まず、子供のよさについてであるが、課題解決の際に表出する反応全てを、子供のよさとはとらえず、次のようにとらえていきたい。

課題解決において、自分の願いや目標をもち、見通しをもって活動する際に表出する、こだわりのある反応であること、つまり、意志や欲求が内在した主体的な反応・こだわりを子供のよさととらえたい。

この子供のよさを発揮させ、生かすためには、学習を系統的に構成することが前提となる。なぜなら、意志や欲求は既習の内容や方法と比較し異同や矛盾、限界などを感じたときに高まるものだからである。

新しい課題に直面した子供は、

- これまでに学習した何をもとにして考えればいいのか。 . . . 『活用』
- これまでの解決方法がここでも使えるのか。 . . . . . 『見通し』
- なぜ新しい課題を考えていくのか。 . . . . . 『よさ』 など、

既習と関連づけることによって、子供自身が構造的（既習と同じ表現、処理でまとめる）にとらえ、主体的に解決へと向かうのである。

そのためには、教材の系統性・累積性を見極め、既習内容とのかかわりを構造的に把握したうえで、統合的・発展的な学習指導を展開することが重要になるのである。